

訳あり美少女を集めて
チームを作ろうとした
男の末路

たんきー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超未来都市サイバータウン。そこではアイドルと配信者とアスリートと警察とナロー系小説の冒険者の間の子のような存在、「パンカー」が街を守っていた。転生者、ヒューゴ・ハジメマシテは訳ありの美少女を集めてパンカーたちの「チーム」を設立しようとする。

しかし出来上がったチーム「ディープ・ダイヴァイン・バーサーカー」、通称「DDDB」は先行ワンキル上等のともない少女たちの集まりだった。

サイバータウンで最も敵に回しては行けない組織のリーダーとなったヒューゴ・ハジメマシテの明日はどっちだ。

目次

O P	O P	O P	O P	ク な 一 日	O p e n i n g
V	IV	III	II		サイ バー タ ウ ン の パ ン
58	45	29	16	1	

Opening サイバータウンのパンクな一日

拝啓、現代のWEB小説とか大好きな奴ら。

俺の名はヒューゴ・ハジメマシテ。転生者だ。君たちに先んじて転生に成功した俺だったが、残念ながら転生の際に神様と会うことはできなかった。

この時点で嫌な予感はしていたのだが、転生した先はよくあるファンタジー世界デハナク、サイバーパンクな末法の世だった。

そこはアイサツが大事な感じの世界だ。俺の名字から見ても分かるだろう。ちなみ
にこの世界の名字はだいたい皆こんな感じなので、少しすれば慣れた。

しかも困ったことに、ステータスオープンと叫んでもステータスは見れず、魔力とかを計測する機械も存在しなかったため、チートと呼べるチートを得ることはできなかった。

そう、俺は転生ガチャで爆死したのだ。SSR神様転生、SRチート転生はおろか、Rであるやさしい世界ですらなかった。レアリティはノーマル、ハードモード世界転生チート無しだ。

俺は絶望した。

せつかく転生したのに、チートもなしとかそんなの無いじゃん。あんまりじゃん、ジャンジャンバリバリジャンバリジャン。

しかし、文句ばかりは言っていられない。転生してしまった以上前世には戻れない。幸いだったのはこの世界が超未来世界だったことで、娯楽や文化は現代よりも優れたものが多く、過去の様々な娯楽にふれることもできるといふ点だ。

つまり最低限、文化的な生活ができれば生きていくために不便なことはない。それならいつそチートなんてなくなつて、むしろ目立たずにまっとうな生き方ができるというものである。

いやー目立ちたくない、目立ちたくないなー俺！

さて、ここで少し考えてほしいのだが、いくらチートなしのハードモードな異世界転生でも、転生者っていうのは色々と利点がある。

何より大きいのが幼い頃に転生すれば、他人とは人生の準備にかけられる時間が段違いであるということ。他の連中がはなたれ小僧だった時期から、将来を見据えて自分の適性を探すことができる。言ってしまうえば神童補正。おとなになればただの凡人になつてしまうとしても、神童だった頃の経験は活かせる。

これがまず一点。

そしてもう一つ、異世界モノの小説で、多くの転生者にとって武器になるものがある。

古今東西様々なチートモノ異世界小説が世に出て、そのチートはまさしく十把一絡げ、膨大な種類が溢れているだろうけれど、その根底にあるものは案外共通している。

現代的な感覚だ。

この時代、世界、文化とはことなる価値観から見た独特の視点。差別される種族に対する偏見のなさ、奴隷のような立場に対する親切心。それらは明確にこの世界の常識と異なり、そして多くの場合転生者にとってプラスに働く要素である。

特にこの世界は、ちよつと普通ではない常識がまかり通る不思議世界。ハジメマシテなんて名字がありふれている時点でお察しだが、トンチキ極まりないバカ世界だ。

俺はそんな中で、幼い頃からこの世界の文化を学び、そして独自の視点で他人とは違う方法で人生の充実を図るべく考えてきた。

前世では平々凡々、可もなく不可もなくを地で行く人生を送っていたが、この世界では違う。チートでウハウハにはならなくてもいい、ただ他人よりも優れた技能と立場がほしい。

そんなありふれた野心で俺はこの世界を生きると決めた。

もともとチートなんてあっても、俺は他人よりちよつとまともで、それでいて他人にバカにされない生活を望んだだろうから、むしろそれを自分の力で出来る今は、いつそ健全と言える。

目立ちたくないのだ。多くの人間に評価されず、一部の人間にだけ評価される。そういうちよつとSUGGE生活を送りたいのだ。

結果、色々考えて、考えて考えて、俺はある一つの結論にたどり着いた。

『訳あり美少女を集めてチームを作ろう！』

これだ。

それはもうわかりやすい結論。

なにかといええば単純だ。現在、超未来都市サイバータウンの治安を守っているのは、アイドルと配信者とアスリートと警察とWEB小説の冒険者の子のような存在、「パンカー」だ。

このパンカーというのは、治安を守る警察機構であると同時に、その実力は冒険者のようなランク制で区別され、彼らが戦う姿は配信されるため、アイドルや配信者のような人気商売であるということ。

この「パンカー」を取りまとめるチームのリーダーを、俺は勤めようと考えたのだ。

残念ながら——もしくは幸いにも——俺にはパンカーとしての適正はなかったが、それらを纏め、運用し、マネジメントするリーダーとしての適正があった。

ここで言うリーダーとは、つまりアイドルゲームというプロデューサーやマネージャーのような立場のこと。なんとなくおわかりかもしれないが、俺はソシャゲのアイドルゲームのように、パンカーを集めてプロデュースをしようと考えたのだ。

どうでもいいけどこの世界、というか超未来都市サイバータウンはコンピューター様が適正を決めた職業じゃないと就職できないという、中々ディストピア感ある仕様だ。やばいぜ。

んで、ここで俺は考えた。俺の感性ならこの世界では普通パンカーにならないような訳あり美少女を選ぶこともできる。選ぶための準備期間も山程ある。

これが俺にとつての転生チート、神様の贈り物だった、ということだ。

そうして集まった、俺だけのチーム。人気商売で男がリーダーとかバレたら炎上モノだが、そこは俺が裏方に徹すれば問題ない。アイドルゲームだってバレなければチームでも許される。

まさしく完璧な計画。コレ以上無いほど俺のチートでゆるゆる目立たずそこそのこの立場という目標は叶えられる。

そう思っていた。実際にチームが発足するまでは。

——俺は完璧に準備をした。最高に訳ありなメンツを集めた。中には偶然から付いてくる事になった子もいるが、俺は誰もが目を背けるような訳あり美少女も仲間に加え

た。

ただ、見誤っていたのだ。美少女たちを——というのもあるが、何よりも。

この世界を。

過去に戻るのなら、俺は俺に言っただけでやりたい。パンカーチームのリーダーになんかなるな。お前が思っているよりも、

この世界はずつとずつと、狂気に満ちている——

爆発が起きた。

超未来都市サイバータウンの一角。サイケデリックな電光掲示板があちこちに散らばめられて、如何にもという表現がよく似合うパンクな町並みに、それとは似つかわしくない無機質な爆発が起きた。

瓦礫をまるごとふつとばし、爆風の中から何かが現れる。

レースカーを魔改造して世紀末風にしたかのような、正面がドリルになっていて、タ

イヤもドリルのような棘がついている代物だ。

如何にも、傾いているというか、ヒヤツハーしているというか、そんな車である。

しかし、それ以上の特徴はない車だった。

車には特徴がない。しかし、この場合乗っている人間が特徴的だった。

少女である。幼い——十代前半の少女であった。流れるような黒髪を、一部だけ編み込んでいて、楚々とした印象を受ける。

顔立ちもおっとりしていて、胸部が暴力的なまでにでかいことを除いては、とても楚々とした印象を受ける。だが、何よりも彼女を異質たらしめるのは、その服装だろう。

メイド服だった。それもコスプレ用ではない古めかしいメイド服。

ここが超未来都市ではなく、十九世紀頃の欧州であるかと誤解させるような。

そんなメイド服をきた少女が、今にも泣き出しそうになりながら車を運転していた。

彼女は異質だ。この街の雰囲気から浮いている。しかし、間違えないでほしいのは彼女はこの街にとつて異質であるということ。たとえコレが現代だったとしても、棘付き車を運転する旧メイド服の少女は浮いているが——この街はそれ以前に、異常極まりない街なのだから。

——直後現れたものがある。それらは主に二つに分けられる。

一つは、〃シャケの形をしたバイク〃だ。それ以上でもそれ以下でもない、シャケ型

バイク、超未来都市サイバータウンで二十年以上ベストセラーとして君臨する、傑作バイクである。

もう一つは、黒ゴス姿の銀髪少女。年齢は一桁程度に「視える」。幼い顔立ちに、満面の笑みを浮かべていた。そこから、ギザギザの「牙」が見え隠れする、黒ゴスがアンバランス極まりない野生児の印象を覚える少女。

それらが同時に現れて、黒ゴス少女は、シャケ型バイクを踏みつけて転倒させながら、車へと近づいてくる。シャケ型バイクに備え付けられたイクラロケットや、機関銃が乱舞する中を、それらを両腕で薙ぎ払いながらバイクを踏みつけて迫ってくる。

——慌てるのは車を運転するメイド少女だ。

何を隠そう、彼女は別に運転スキルが高いわけではない。むしろ、この場で運転できるのが彼女しか居なかったために、消去法で車を運転しているに過ぎない。

それでも、彼女の運転する車は、そちらに向けて放たれる機関銃とイクラロケットを回避している。ただし、これは外部からの運転アシストによって為されるものであり――

『おっと、 “メイド” くん。 “ガルル” が突っ込んでくるぞ』

——それをサポートするものは、外部にいた。

車の中央に備え付けられたモニターから声がする。そこに、ピンク髪の、魔法少女のような服装をした“二次元絵が現れる”。それらはまばたきをして、生きているように動いて見せる。

つまるところ現代で言うV t u b e rというやつやつのL i v e 2 dというやつだ。まあ、この時代であれば平面の存在ではなく、それこそアニメのように動き回ることもできるのだが。

とりあえず、彼女には中身がある。電子生命体とかではない。運転サポートをしているのも、この魔法少女だ。

そして、彼女の指摘を受けて運転アシストが作動し、大きく車が横に動く。

直後、“ガルル”と呼ばれた銀髪少女が、車のすぐ後ろに“着弾”した。

彼女の狙いはこの車——ではない。

むしろ、この車を守るかのように、飛んでくる弾丸を纏めて弾き飛ばす行動を見せる。そのまま周囲のシャケバイクに襲いかかる。

——彼女は味方だ。暴走しているが。

「ひ、ひ、ひ、“ヒメミヤ”ちゃああああん！こ、この後どつちに行けばいいんですか
ああああああ！」

泣き出しそうになりながら、＼メイド＼は＼ヒメミヤ＼という画面上の魔法少女に声をかける。

『おいおい、ボクが支援してるんだから、口頭での指示なんていらぬに決まってるだろ、＼メイド＼くん』

「で、でもでも!!」

『それよりも——つておい、ちよつと待て? 誰だ今配信でボクのことを貧乳だとか言つたやつ!!』

「あああああああああああああヒメミヤちゃあああああああああああん!!」

＼メイド＼はついに泣き出してしまった。

一瞬、車体が揺れる。

更に＼メイド＼は泣き出して、果たして彼女は今、前が視えているのだろうか。

『ちよつと静かにしてくれ! 今レスバトルが忙しいんだ! クソ、誰がクソチビだ! それ以上言つていいことと悪いことがあるんだぞ!? つていうかガルルくんの方がまだ小さいからな!』

「あああああああああああああああああああああ!!」

『——つておい、ちよつとまでメイドくん。マグロネットワークが暗礁に乗り上げた。』

支援がおくれな……』

ノイズ。

最悪のタイミングだった。

魔法少女の体がノイズにまみれたかと思えば、消えてしまった。

これが何かと言えば、“サポートがなくなつた”。ということ、当然運転なんてほとんどできないメイドは、錯乱して取り乱す。

しかもそこに、

「つーかーまーえーたー」

——ガルルが、目の前に迫っていた。

「びっ」

車に、ではない。しかし、間近に。メイドが悲鳴を上げるのが聞こえてくる。

——俺は、それを間近で見ている。

そう、この場にいるのは、銀髪ゴスロリ少女、旧メイド服少女の二人だけ——ではない。後方のシャケバイクにはそれを運転するエージェントが。

そして車の後方には——俺が。

俺は車には乗っていない。あくまで乗っているのは先述の通りメイドだけだ。では、俺はどこにいる？　そもそも、ガルルは何をもって「捕まえた」と言った？　そう、この車はあるものを牽引していた。俺はそこに乗っていたのだ。何を牽引している？　端的に表現できる。

——檻だ。

俺は現在、檻に入れられて、メイドの運転する車に牽引されて運ばれている。ガルルは、そんな俺の入った檻を捕まえたと言ったのだ。

そして、檻をその両手で引きちぎりながら、

「お兄ちゃん、捕まえた!!　おてて、食べさせてえええええええ!!」

俺の手を食いちぎろうとしている——!

「う、」

——俺はそれまで、必死に黙っていた。

何故なら、〃悲鳴を上げてはいけない〃から。しかし、口を開けば悲鳴と命乞いがマシガントクしてしまうのは目に見えている。だから、できない。

黙っていなくてはならない。

しかし、もう限界だった。

「うわああああああああ——ッ!!」

耐えられない！ 怖い、怖い怖い怖い！ 目の前で俺を食べようとしてくるガルルも、メイドの危険すぎる運転も、そもそも遮蔽も何もない場所で乱発される機関銃とイクラロケットも——！

何もかもが俺の正気と命を奪おうとしてくる——！

——そうだ、これが俺が過去の俺に言ってやりたかったこと。

この世界は正気じゃない。

パンカーのリーダーが裏方だけをやっているはズがない。絶対に〃最悪の形で巻き込まれる〃。そして、下手をすればゴミクズのように命を落とす。

そんな世界に身を投じるべきではなかったのだ——

——しかし、そんな俺の嘆きなど無視して、世界は俺を逃さない。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃんお兄ちゃん！ おてて！ おてて!! おててー！」

——俺を食べようとしてくる “宇宙怪獣少女”。

名を、“ガルル・グラララ”。

『バーカバーカ！ ハーゲハーゲハゲー!!』

——通信が回復したことに気が付かず、レスバトルで敗北している “電子少女”。
名を、“ヒメミヤ・オクライリ”。

そして——

「あつは——ご主人さまの、悲鳴だあ」

——今、俺が悲鳴を上げたことで、先程までなんとか正気を保っていた “奉仕少女”。

名を、*“メイド・メイドインアリス”*。メイドとは彼女の本名だ。

——彼女たちが逃さない。

「おてて——！」

『オガクズー！』

「ご主人さまあ、ご主人さまあ、もつと、もつと可愛い悲鳴をあげてくださいひひひひひいー！」

彼女たちこそが、俺の率いるチーム『デープ・ディアバイン・バーサーカー』の愛すべきトリプルエースなのだ。

——これは、そう。

そんな彼女たちに、そしてイカれた世界に囲まれた。

——訳あり美少女を集めてチームを作ろうとした男の末路の、物語。

超未来都市サイバータウン。

なんともIQが低い名前だが、これは正式名称だ。超未来都市が肩書ではなく、ここまで含めて町の名前なのである。超未来都市サイバータウン。本当にバカみたいな名前だ。

しかし、この街にはある法律がある。超未来都市サイバータウンを略してはならないのである。普通ならタウンとかそういう呼ばれ方をするのだろうが、超未来都市サイバータウンでは必ず超未来都市サイバータウンと呼ばなければならず、それ以外の名前で読んだことがバレた場合、その場で超未来都市サイバータウンの名前を十回斉唱する必要がある。

なお、これは超未来都市サイバータウンができて最初に作られた法律であり、作ったのはこの街を管理するコンピューター“AGI”様だ。ちなみにアジとよむ。スーパーAI“AGI”。

制定した理由は、この名前が最高にカッコイイと思うのに誰も呼んでくれなかったかららしい。アホじゃないか？

ところで、超未来都市サイバータウンは管理社会だ。コンピュータが管理している如何にもな街である。人々は職業をコンピュータAGIが定時した適正のある職業の中から選択し、その仕事につく。

俺ならばパンカーチームのリーダー。俺のチームに所属している面々はパンカーの適正があり、その職業を選んだわけである。選べる職業は複数あるが、それ以外の職業を選択することは絶対にできない。

そんな感じで俺達はコンピュータAGI様に管理されているわけだが、何とAGI様は休暇すら管理してくる。

まず、俺達が休める日はAGI様によって決まっている。これはAGI様が計算の上叩き出した、もっとも効率的に休養できる日なのだ。決してブラックではないが、適正次第では休みが月に4日しかないなんて人もいるから、ここらへんAGI様は平等に不条理だ。

ちなみに俺は月に平均十四日。とても多いように見えるが、これにはあるからくりがある。

まあなにかといえ、俺は今日休みなわけだ。昨日の夜は日付が変わるまで眠らず、起きたのは十時過ぎ。実にご機嫌な休日だな。

当然AGI様には怒られるような休日だが。

んで、俺は今でかけていた。AGI様は休日においても俺達を管理するが、流石に休日の行動を強制することはない。ただ、「推奨行動」というものは存在する。

俺の推奨行動は朝八時に起きて早朝ランニング、それから朝食を食べて昼までジムで汗を流して昼は温泉でリラックス、午後は読書や映画鑑賞などが推奨されていた。

もちろん完全にぶっ千切っている。ここらへんは現代的な感覚がまだ残っている証拠だろう。休みというのは無為で救われていなくちゃダメなんだ。

休むために行動を起こすなんて意識高いやつのことだぜー！

「しかも、今日は待ちに待ったゲームの発売日、俺は自由だ!!」

外出しているのも、ジムに通うためなんかじゃない、ゲームを買うためだ。予約してあるゲーム屋に向かっている最中である。

現在、人類が普遍的にできない技術の中に、空間転移なんてものがある。不可能ではないが、特別な技術が必要になるので、誰にでもできるわけではない感じ。

何が言いたいかと言うと、移動は基本的に乗り物が必要になる。

俺は今、その乗り物にのって移動していた。

何に乗っているかというと、ウニである。

「チクチクするんだよな……これ」

一応材質は特殊なもので、グニグニ曲がるので痛くはないが、それはそれとして先端

は尖っている。移動に使用する乗り物の中でも外れとされる部類だ。

俺は現在、寿司のレーンのような形をした通路を、他にも様々な海産物に乗った人々とともに移動していた。これが超未来都市サイバータウンにおける汎用的な移動手段だ。

自動走行、目的地を入力したら規定の時間で必ずたどり着くことが出来る。これのすごいことは、このレーンに乗るためのスポットにたつたタイミングで乗り物が“生成”されるということ。目的地にたどり着けば乗り物は自壊し、その分のエネルギーは還元される。

究極のエコ乗り物だ。

これとは別に、自由に町中を飛び回るエアバイクと呼ばれるものが色々と存在するが、普通の移動でそれを使う人間はそんなに居ない。エアバイクの運用は主にレーンがない場所を移動するためにある。このレーン、超未来都市サイバータウンのどこにでも存在するわけではないからな。

そうして、ウニにのってドナドナされた先には、行きつけのゲーム屋がある。

この日を俺はどれだけ楽しみにしたか、待っているよ『ヨコハラ・ドスエ』——！
……え？ なんのゲームかって？ ちょっとまっててよ興奮しててそれどころじゃないんだから。

と、意気揚々と店を訪れたのだが、

木彫りのクマに踏み潰されて店が消えていた。

「な——」

——なぜ？ クマ？ 木彫り？ 海産物ですらない？ あ、口にはシヤケがある、ピチピチ動いているけどアレはもしかして生きているのか——!?

いや、驚いている場合ではない。この世界の常識として、機械は海産物の形をしているのが常なのでそういう驚き方をしたが、これはつまりその法則に則らない存在ということだ。

木彫りのクマが数十メートルに巨大化して馴染みのゲームシヨップを踏み潰しているというの、なんというかシヨツキングな映像だが、流石にそれで思考停止しているは超未来都市サイバータウンでは生きていけない。

見ただけで、これがどういった経緯でこうなったのかを理解できなくては、パンカーチームのリーダーは務まらない。

これはつまり——

『——やあ、残念だったねリーダー』

突如、声がした。

声の主は上から降りてくる。それはピンク色の球体だ。それが俺の目線まで降りてくると、ガチョンガチョンと変形してピンク染めの魔法少女へと変形する。

この変形過程、正直センスが無いので気持ち悪いのだが言わないほうがいいと思っているので黙っている。

「……ヒメミヤかあ」

『おいおいそんな顔をするなよ、ボクが入れば事件の概要がすぐに分かるんだぞ?』

ピンク髪のデフォルメされた三等身のマスコット少女、ヒメミヤはくすくすと笑ってみせる。ちなみにだが、これはヒメミヤ本人ではない、遠隔操作されているSDロボットだ。

ヒメミヤ・オクライリ。

我がチームの参謀とも言える、電子ハッカーにしてバーチャル魔法少女。ハッカーとしては間違いなく凄腕で、彼女に突破できないセキュリティはないと言われるほどだ。

バーチャル魔法少女は、要するにVirtualuberというやつなのだが、ヒメミヤの場合は電子上だけでなく、リアルでもバーチャルであることにこだわっている。本人がその

場に姿を見せないのだ。今回もこうしてSD魔法少女ロボを飛ばしてやってきている。

器用に動く姿は、それこそSDの二次元キャラと言われても違和感はない。

『ボクは君に、素敵なお知らせを届けに来ただけだというのに。残念だったね、ゲーム』
「言うな……頭が痛い」

——パンカーとそのチームリーダーは、他の職業に比べて休みが多い。それには単純な、そして切実な理由があったのだ。

『さ、それじゃありーダー、休日出勤のお時間だ』

不測の事態で休日が潰れるのである。

そう、今日このときのように——

『じゃ、最初から振り返ろうか。今日、我らがチーム“DDB”のリーダー、ヒューゴ・ハジメマシテは馴染みのゲームシヨップに最新ゲーム“ヨコハラ・ドスエ”の購入にやってきていた』

「そこから話すのか？」

『おいおい、もう配信始まつてるんだぞ？　いま来たばかりの視聴者のために、情報は正確に伝えないと』

「そこに興味があるやつは居ないとおもうけどなあ」

——配信。

パンカーチームは事件が発生した場合、その姿を配信で超未来都市サイバータウン全土に見せる義務がある。これはパンカーチームの透明性の確保と、人気商売としての興行の意味合いを含む、色々と合理的な手法だ。

この配信はコンピューター“AGI”によつて管理されており、公平性が高い。今も数万人規模——ウチは良くも悪くも有名だ——の視聴者がいる。

『ちなみにヨコハラ・ドスエはいわゆる“近未来”ジャンルと呼ばれるジャンルでもトップクラスに知名度を誇る“ドスエ”シリーズの最新作だね。売りは何と言っても超美麗グラフィックの主人公、サエヤマダ・ドスエ閣下』

「閣下ー」

コメントでも『閣下ー』『閣下ー』と主人公を称えるコメントの波が形成される。色々ツツコミどころはあるが、要するに名物主人公のシリーズ作品で、個人的にはキャラクターとシナリオが好みなのでプレイしている。

たまに展開についていけなくなることを除けば、良質な作品だ。

なお、これは宣伝である。ヒメヤマはこういうところで余念がない。

『そして、リーダーがやってきたこの店は、大衆娯楽を幅広く扱うゲームショップだった。ゲーム以外にも漫画やアニメ、色々よね』

『俺そこに行ったことあるわ……』『まじかよリーダーと同じ場所に居たことあるとかお祓い受けとけ』『ちよつと近寄らないでくださいます?』

この人達俺を何だと思ってるの？

『基本的には店の主人が一人で切り盛りしていたんだが……うん、見た感じダメっぽいね』

「リスポーンできるといいんだけど」

『流石に被害者がリスポーンできないようじゃ、AGI様も壊れてるが……残念ながら今回はそううまくも行かないんだな、これが』

リスポーン。つまり再生である。俺達の記憶他生体情報はAGI様に保管されているので、何かしらの要因で死亡してしまった場合、その情報を元にクローンが作られる。もちろん、その死亡が自殺や悪事を働いた結果でなければ、の話だが。

それはそれとして、スワンプマン的なあれやこれやで俺は死にたくない。というか、これが倫理的に許される辺りでこの街の倫理を察するに余りあるな。

「何の問題があるんだ？」

『彼は知ってしまったがために “消された” からだよ』

「……………そうか」

——俺は閉口してしまった。

そりやそうだ、罪のないゲーム屋の親父が突然殺されるなんて、 “知ってしまった” から以外の理由はない。考えないようにしていただけだ。

この世界は基本的にくそつたれなので、色々悪い奴らが跋扈している。それと戦うパンカーの仕事が亡くならないから、食いつばぐれないということでもあるのだが、それはそれとして色々とクソみたいな世界であることに違いはない。

つまり、悪い奴らの知られると困る情報つてやつがあつて、それを知ったやつはこうして消されてしまうわけだ。

そして、ここで問題が発生する。

殺された原因が情報であるという事実だ。

何が問題かと言えば、とても単純だ。

『店主を殺したのは反大衆娯楽テロリスト “アンチ・ツナマヨネーズ” 。通称ツナマヨの連中だ』

——ヒメミヤ・オクライリは電子ハッカーである。

彼女に突破できないセキュリティはないと言われてる。——この情報は正しくない。
い。

どこが正しくないのか？

『連中は、『ダイヤモンドブリ』を所有するブリクラステロリストである、ということを知ってしまったから、ね』

“言われている”という点だ。正確に言うヒメミヤ・オクライリに突破できないセキュリティは“存在しない”。

あらゆるセキュリティも、秘密も、彼女の前ではすべてが丸裸。

今、コメント欄ではヒメミヤが発言した際、そこにノイズが被せられたはずだ。彼女は一般人が知ってはいけない情報を発信したのだから。

コンピューター“AGI”が止めたのである。

『ノイズ来た！』『AGI様仕事してる！』なんてコメントが流れていることだろう。それほどの情報を生で知ってしまった俺は——

——直後、木彫りのクマの目が光、俺に向けてビームが発射された。

「うおおっ！」

幸い、察知していた俺はヒメミヤボディを盾に回避、木彫りのクマから距離を取る。

「……に、逃げるぞ!!」

『ガッテンガッテン』

ヒメミヤが外に出てこないのは当たり前だ。

彼女は表に出た時点で、あらゆる悪の組織に命を狙われる。絶対に外に出ることのできない少女、それがヒメミヤ。

——俺が拾ってしまった、“一人目”の訳あり少女。

今回も、彼女は俺に死に至る情報を連れてきた。

俺がチームのリーダーであるために。知らせる義務にはヒメミヤにあるから。

ああ、わかってる！ ヒメミヤを表に引きずり出したのは俺だ！ 彼女をパンカーにしたのは俺だ！ その責任は俺にある。

だとしても、それがわかっていても、どれだけ承知していたとしても、

「後で覚えてろよヒメミヤ——！」

『ハハハハ！』

——文句を口にする権利くらいは、許されているはずだ！

かくして俺は休日であるにも関わらず事件に巻き込まれ、木彫りのクマから命からがら逃げ出すことになるのだった。

O P III

ヒメミヤ・オクライリは一般的に二つの認識を持たれている。

俺のチームに所属するパンカー、もしくははいつ爆発するかわからない不発弾。

彼女が知っている情報は、多くの場合知っているだけでコンピュータAGI様から、「記憶洗淨」という処置を受けるような代物だ。つまり記憶を消されてしまうという事。それらは一つの情報を知るだけで強制的に行われてしまう。今彼女が口にした『ダイヤモンドブリ』はその中でももっとも秘匿度の高い情報だ。

具体的に言うと、記憶洗淨の範囲が広範囲に渡る。少なくともここ一年の記憶は保持できないものと思つたほうがいい。知つているという事実だけでなく、それを知る切っ掛けになつた情報源の記憶も消去しなくてはならない。

ちなみに俺は、一応そういう情報を知ることのできる権限を有している。逆に、ヒメミヤはその権限を有していない。万が一彼女が捕まれば、それは記憶洗淨だけでなく、彼女の「人格」すらも一度洗淨しなくてはならないだろう。

なので、彼女は今、この街のどこにいるかを誰も知らない。コンピュータAGI様から必死に逃げ回っている——ということになっている。

彼女の性格は一言でいうと人見知りの超コミュ障。こうしてロボやバーチャル上の自分を嘸まさない、会話どころか目を合わせることもすままならない。

この世界のすべての人間が嫌いでも言わんばかりに、口が悪くシニカルで配信上でも、よく視聴者とレスバトルを繰り広げているが、根がコミュ障なのもあつて興奮すると語彙が死んでクソザコになる。

逆に、電腦上における彼女のスキルは凄まじく、彼女はあらゆるネットワークのセキュリティを突破してその秘密を知ることが出来る。歩く機密事項。彼女の存在はコンピュータAGI様だけでなく、あらゆる悪の組織が欲しがる代物だ。

——もちろん、彼女を見つけることはどちらにも叶わないのだが。

彼女の性格にとつても、彼女の立場にとつても、逃げ隠れることは理にかなっていないのだが、そもそもヒメミヤが逃げ隠れるようになったのは、彼女が超未来都市サイバータウンの秘密を知ってしまったから。

いや、知ったとAGI様に思われたから。

——冤罪だ。確かに彼女には電子ハッカーの才能があり、実際に世界の機密を丸裸にできるが、彼女が逃げ隠れるようになった最初の原因はAGI様の誤解なのである。ひどい話だ。まあ、それを利用しようと思った俺も大概なのだが。

俺とヒメミヤの関係はもう随分と長い。俺のチームにおける最古参は伊達ではなく、

俺がパンカーチームを結成しようと思ったきっかけがある意味でヒメミヤなのだから。

彼女こそ、俺が見つけた最初の訳あり美少女である。

彼女の訳は『冤罪』。

——まあ、今やそれは冤罪でもなんでも無く、事実以外の何物でもなくなっちゃっているのだが。本当にこのスキルツリー、開放してよかったのかな？

『おいおいリーダー！ 考え事をしている暇はないぞ、木彫りのクマがこっちを狙っているー！』

「わかってるってのー！」

現在、俺はヒメミヤロボが変形した車を必死に運転しながら、木彫りのクマから逃げ回っていた。あのクマ、なにやら振動しながら凄まじい速度で接近してくる。口に収まっている生きたシヤケがピチピチ跳ね回っているのがシユールだが、それはそれとしてその速度はこちらの最高速よりも早い。

それが断続的にビームをぶつ放してくるのだから、正直どうしようもない。建物を盾にして逃げ回っているが、これもそのうち限界が来るだろう。

「畜生なんだあの木彫りのクマ、本当は木彫りじゃないんじゃないか？」

『鋭いね、あれの材質はスキャンしたところ、固形化した鰹節だったよ』

「すりおろされて粉々になっちゃまえー！」

言った途端に高熱のビームがすっ飛んできた。このままではすりおろされるのはこちらの方だ。いや、こんがり焼かれて香ばしくなるといのが正しいか。

どっちでもよろしい！

「このまま逃げるとして、どこに逃げる!? この辺りはうちの警戒範囲じゃねえぞ!」
 『ここからボクたちのシマに逃げ込むとなると、アレを三十分は撒きながら逃げ続ける必要があるね』

「わかつてる……非番のやつに来てもらうしかねえか……」

——パンカーには、自分たちのシマ、縄張りがある。今俺のいる場所は、俺のチームの縄張りではないので今日仕事をしているヤツは入ってくる事ができない。

なんともふざけた話だが、一応抜け道はある。今日、非番の人間がもしここにやってきたとしても、それはたまたま偶然通りがかっただけ。そして巻き込まれたのも止むに止まれぬ事情ゆえ。

正当防衛が成立するのでお咎めなし、というわけだ。

まあ、この抜け道最近まではなかったんだけどな。理由? AGI様は頭が硬いんだよ。

『もうすでに連絡はしてあるよ、後十分で到着さ』

車に変形したヒメミヤロボのモニターに移るバーチャル魔法少女Vヒメミヤが指で

十分を示して見せる。こういうところは現代から技術が進歩したことを感じて結構好きだ。

イラストが口パクをしているだけでなく、ポーズや動き回ることが出来るので、見ていて飽きない。

まあ、このあざとい動作は集金の動きなので、ヒメミヤがやつてもなんとも思わないが。

『わあ、リーダーの目が冷たい。ボクを可愛がれよ、魔法少女だぞ?』

「リアルのお前は可愛いと思うよ」

『ぶえっ!?!』

——まあ、一度しか見たことはないのだけど。

ヒメミヤの顔を知っているのは、実はこの世界で俺だけという事実。ヒメミヤは幼い頃に冤罪で人格洗浄の対象になって以降、両親は記憶洗浄でヒメミヤのことを忘れていた。ヒメミヤの周囲にいたすべての人間がヒメミヤを忘れて、ヒメミヤはそれから一人で生きていた。

だから、ヒメミヤの顔は俺しか知らない。

この超管理社会において、ヒメミヤのような理不尽に排他される訳あり美少女がどこかにいるはずだと、ネット上をかき分けて探し当てた俺だけが、彼女の顔を知っている。

ストーリーカーもいいところだが、俺としても当時は若く協力者が必要だったのだ。

そこで出会った電子ハツカーとしてはブリテク級の実力を持つスーパーハツカー、ヒメミヤ・オクライリの存在は渡りに船。向こうとしても一人でAGI様から逃げることは不可能だと考え、俺とヒメミヤの共犯関係は始まった。

そう、最初俺達はパンカーチームではなかったのだ。俺は安定のためにパンカーチームを作るのではなかったかって？ そのつもりだったよ？ ただ、少しだけ色々と想定外が過ぎたのだ。

俺はヒメミヤをただの冤罪だと思つて接触した。ちよつと優秀すぎる電子ハツカーが偶然何かしらの機密を知つてしまつて、それから守るためにAGI様が冤罪認定したのだと。

幼い頃の俺にとって、この世界を統括するコンピュータAGI様は完璧なものに思えた。実際はとんでもねえポンコツクソAIもいいところなのに。管理社会としては程よい管理をする管理AGIだと思つていたのだ。確かに職業の選択は制限されているが、それは適正のない職につかないための措置でもあるし、休暇だつてきちんと与えられる。決してブラックではない。

一見するとAGI様は素晴らしいAGIに見えるのだ。

だが、実際には違った。AGI様は本当にうっかり当時四歳になる少女を冤罪で人格

洗浄しようとしていた。それが1つ目の誤算。

もう一つはヒメミヤのスキルだ。ヒメミヤは優秀過ぎた。確かに彼女は冤罪で機密情報を知ったということにされていたが、実際に彼女にはあらゆる機密情報を知ることの出来る技術があった。

たとえ今が冤罪であつたとしても、何れ彼女は人格浄化の対象になると確信してしまふような、飛んでもない才能が。

——そんな状況だったから、俺は覚悟を決めるしかなかった。彼女と接触した俺は、もれなく人格洗浄の対象。当時まだ八歳程度の子供だった俺も、だ。俺が転生者じゃなかったら、ヒメミヤはともかく俺は即人格洗浄を受けていただろう。

当時のことは、思い出したくない過去だ。俺もヒメミヤも、普通に今、人として生活できていると言われても当時は信じられないだろう。

そこから色々あつて、こうしてAGI様にも認められてチームDDBとして活動しているのだから、人生とはわからないものだ。

『つて、そんなこと言ってる場合かバカリーダー！ このままだと追いつかれるぞー！』

ともかく、一旦そこから辺は脇に置いて、今は木彫りクマからの逃走だ。あと十分逃げればいいとは言うものの、逃げるにしたって向こうもこちらを追い詰めるべくビームをぶっ放してくるわけ。

いくらヒメミヤが運転サポートをしてくれるとしても、逃げ切れるかどうかは運が絡む。それを視聴者は求めているのだろうが、俺としてはそもそも死にたくないんだよ！

リスポンとか怖くてやってられるか、スワンプマンだぞスワンプマン。この世界の価値観じゃないから言っても誰にも伝わらないが。

「どうにかならないか、ヒメミヤ!?!」

『んんー、とりあえずこのままボクが定めたルートを走っておくれよ！ 勝算はある。』

話せないけど』

「話してくれよ!」

『それだと視聴者がガツカリするだろ!』

そもそも説明すると失敗する。この世界の——というか物語のジnkクス、説明は失敗フラグ。視聴者が先に種を知ってしまうとがっかりするのもあるが、それはそれとして俺には説明してほしいものだけどな!

——なんて言っている場合ではない。木彫りクマのビームが俺の目の前の建物を破壊した。その建物は横幅が百メートル近くある。とてもじゃないが突然のことで回避は難しい。

『オイオイ、このままじゃルートを走り切ることすら難しいぞ!』

「難しかろうが……やるしかないだろ!」

ああ、本当にこういうのはまっぴらごめんだ。

死にかけるだけでもそうなのに、一歩間違えれば肉片すら残さず即死。焼死体になるほうがまだマシではないかという状況で、実際に焼死する可能性は依然継続。

何より嫌なのは、ここから逃げ切ろうと思う場合――

「――手段が、一つしかなくつてもな！」

一つしか選択肢がないということだ。

せめてもう一つ、可能性は同程度でもいい、ろくでもない選択肢でもいい。ただ、一つだけこれ以外の選択肢があれば、俺は迷えたのに。

選択肢のない設問が嫌いだ。こうするしかないという立場が嫌いだ。それでもやるしかないという現実が嫌いだ。

だって――

『――君なら何の心配もイラないさ。一つでも手段があれば、リーダーならやれるとボクは知っている』

――ああ、まったく。

そう言われたら、しようがないよな。

俺は車のボタンをいくつか操作して、迫ってくるビルに、正面から最高速で突っ込む。

後方からはビルム、前方にはビルの瓦礫。回避は不可避、であればどうする？

答えは簡単。

「つだ、らああああああ!!」

俺はばいーんと車を跳ねさせて、ビルの落下面に車を置いた。

ビルはビームで根本が吹き飛び、宙に浮いていた。その下を駆け抜けることは、ビームを回避する必要から不可能だった。だからビーム発射のタイミングでとんだ。ジャンプした後に着地していたら、その滞空時間でビルの崩落から逃げ切れない。

だからジャンプのタイミングで車を反転させ、そのまま落ちてくるビルの落下面を地面にして、最高速で駆け抜ける——!

重力操作すら可能になったこの超未来なればこそその大技。ここからビームは連続で俺を狙えない。俺はそのまま車を奔らせて、激突のギリギリに駆け抜ける。くるりと空中で一回転。地面に落ちたビルで、俺と木彫りの熊を分断。

そのまま駆け抜ける。

『よし抜けた! 目的地到着まで十秒! ……………よし停止!』

「ここからどうする!?!」

『車を対爆発防御に変更。そのうえで——見ていれば分かるさ』

ああ、と察して色々と操作する。

さて、木彫りのクマは現在ビルに阻まれてこちらにコレないわけだが、取れる手段は二つ。迂回するか、もしくは――

――直後、クマがビルを飛び越えてこちらに突っ込んできた。まあ、後者だよな、こつちのほうが手っ取り早いし。

それはそれとして横幅ただけで百メートルあるビルを飛び越えられる鯉節の木彫りクマってなんだろうな。いや木彫りじゃないんだが。

んで、あいつは空が飛べないらしく、そのまま勢いよく落下してくる。そうなれば待ち受けているのは、

『んじゃ、これでチェックメイトだ』

――そうヒメミヤが言うと、

勢いよく、俺達のいた地面が崩落した。当然、木彫りの熊もそれに巻き込まれて落ちていくのだった。

——ああ、どうしてこうなってしまふのだろう。

今日、リーダーは非番だった。楽しみにしていた新作ゲームをプレイすると昨日から豪語していた。彼を巻き込むべきじゃなかった。いや、巻き込んだのはアンチツナマヨなだけだ。

でも、それを私は最初から知っていた。

またこうして、彼を巻き込んでしまったのだ。

ヒューゴ・ハジメマシテ。

私達、チーム「デイトップ・デイヴァイン・バーサーカー」のリーダー。超未来都市サイバータウンの核弾頭のスイツチ。

私をこの世界に連れ出してくれた人でもある。

父から、母から、友人たちから忘れられ、一人で生きていくしかなかった私を、彼は見つけ出してくれた。本気で隠れているはずだったのに、AGIにだって見つかっていなかったというのに。

どうやって見つけ出したのか？ その間に——

『足で痕跡を探したんだよ。電子上でしか探そうとしないのは、この時代の人の悪い癖だ』

——なんてよくわからないことを言う。

きつと、私たちが知らないであろうことをどうしてか知っている、私のリーダー。

ああ、それでも叶うことなら。

巻き込みたくない。私の問題なんて触れないでほしい。彼は私を見つけてしまったことで普通に生きていくことはできなくなった。今も爆発に巻き込まれて地下に落ちている。

決して、それを望んでいないのに。

私のせいだ。

私のせいだ。私のせいだ。

私が悪い子だから、*“ボク”* がヒメミヤ・オクライリだから。——私が *“ボク”* の才能を持っていたから。

もし、そんなものがなければ、今もヒューゴは普通に生きていたかも知れないのに。ただの冤罪だったなら、ヒューゴはこんなことにならなかつたかも知れないのに。

それでも、今もこうして私とヒューゴはパンカーとそのリーダーとして生きている。

——悪い子だ。

私は、悪い子。

そのことを嬉しいと思うなんて。こんなにも申し訳ないのに、一緒にいてくれることが嬉しいなんて——

——私はとつても悪い子だ。

ああでも、

私より悪い子が、私達のチームには何人かいる。

今、私達の横を通り抜けて、木彫りクマに挑みかかった、*彼女*のように。

『リーダー、対シヨック態勢だよ』

「そこはちゃんと揺れないように作れよ！」

なんて話をしながら、*ボク*たちは地下へ着地する。

そして、見た。

一緒に落ちてくるはずだった木彫りのクマ。正確に言うと、一緒に着地するはずだった木彫りの熊。それが——地面に墜落した。

何故か、

両手両足を喪っていたからだ。

「……なあ、そういえば今日の非番ってよ」

『おいおい、リーダーなんだからちやんと、メンバーのシフトくらい覚えてるだろ?』
そうだけだよ、とボクの言葉に頭をかくヒューゴ。

ああ、そうやって面倒そうにしているところが可愛いんだよなあ。

——それはそれとして、ヒューゴが呆れるのには理由がある。

それは、目の前にあるものが原因だ。

一つは、手足を「削り」取られた木彫りクマ。口に収まっていた生きているシャケが消えている。そして、ボクたちの目の前に——

シャケと味噌汁に白米。ごきげんな朝食が並べられていた——

「——おまたせしました、ご主人さま」

カツン、と響く足音とともに着地する少女。

旧メイド服の彼女は——

「メイド・メイドインアリス、只今到着いたしましたあ」

——瀟洒な雰囲気とは裏腹に、華やぐような——というか明らかに発情してどこか

イツちやつてる笑みで、ヒューゴにアイサツをしてきた。
ああうん、木彫りクマを解体できて嬉しかったんだね。

O P I V

この世界には、現代では考えられないような飛んでもない才能、技術の持ち主がいる。突破したくなくても電子の壁をすべて突破してしまうヒメミヤのように。

それらは、ある時期から突然出現するように成った。まるでこの世界の法則が書き換わったかのように。

原因は当然ながら存在する。ダイヤモンドブリだ。

あのブリは、今から数百年前に突如として出現し、それと同時に人類の中に驚異的な才能を有する超人が生まれるように成った。

彼らの特性は、「理由が付けられない」ことだ。ヒメミヤは最強の電子ハッカーだが、どうしてああも簡単にセキュリティを突破できるのか、彼女本人にも説明がつかない。

同じように、世界各地でわけのわからない技術を持つ人間が現れて、世界は大きなパニックになった。

それから数百年、現在この世界は超未来都市サイバータウンとその外で区別される。数千万人が暮らすこの超未来都市サイバータウンと、そんな超未来都市サイバータウン

に暮らすことのできない外界の人間。

そんな世界でも、当然ながら超人たちは現れる。

彼らは、ダイヤモンドブリが現れたときに出現したことから——一般にはその由来が知られているわけではないが——こう呼ばれている。

——ブリ・テク、と。

「——おまたせしましたご主人さまあ」

今、俺の目の前では信じられない光景が広がっている。

一人の少女が立っていた。旧メイド服姿の少女、俺のパンカーチーム『DDB』のメンバー。彼女は両手に包丁を手にした状態でこちらに振り向いている。

旧メイド服の白いエプロンは、シャケを解体したときに付いたのか、返り血に染まっている。

——笑みを浮かべて、彼女は後方に佇む朝食を背に立っていた。

そう、彼女の後ろには巨大な巨大な朝食が並んでいる。

銀シャリ、焼鮭、そして味噌汁。クマの鰹節を使って作られたのだろうそれは、香ばしい香りとともにこちらの食欲を誘ってくる。

驚くべきことは、これを彼女が一瞬で為したということ。どこから銀しやりと味噌を取り出したのか？　そもそもあの食器はどうなっているのか？　一瞬でどうやればあそこまで完璧に食事を作れるのか？　そもそも木彫りのクマが鯉節なのどうやってわかったの？

などなど、説明できないことは山ほどある。

その上で——その全てに説明がつかない技術。それこそがブリ・テクの真髄だ。まさしく俺は今、神話の光景を見せられているのではなからうか。

ただ、やっているのはあくまで俺の仲間である——
「——ありがとう、助かったよメイド」

メイド・メイドインアリス。

俺のチームでは、三人しかいないブリ・テクを有するパンカーの一人。そして俺のチームにおける古参枠の一人でもあり、同時に——俺が間違えてしまった訳あり美少女の一人、でもあった。

『殺しって、美学であり芸術なんですよ』

むかし、そんなことを十字架に拘束された状態で、ペンチとハンマーをくるくると弄びつつ、笑顔でそんなことをメイドが俺に語ったことがある。

その時俺とメイドの関係は敵対関係で、メイドは俺を殺すために拷問の準備をしていたのだ。

なんでそんなことをするかと言えば、彼女の言葉が何よりの答えだろう。

『人が一番美しいのは、死ぬときだと思います。人が死ねばドラマになりますし、皆さんはそれに感動しますよね？』

破綻した考え方だった。

それは、メイドが破綻しているということでもあり、破綻してしまうくらい彼女のブリ・テクが凄まじいものだったということでもある。

『じゃあ、殺人はそれを彩る脚本のようなものだということですね？』

確認を取るような物言いだ、彼女は否定を許さなかった。当然であるということを確認したかったのだから当然だ。

多分うなずいてたらそのまま殺されていたと思う。

『ここで大事なものは、殺すことの意義です。殺しは美学、芸術。これは色んな人が言っています、そこに見出す意義は異なります』

まあ、確か物語のシリアルキラーが言いそうなことではある。

この辺り、スイッチ入ってるメイドは結構自覚しているのだ。

『私は——殺しとは、一つの愛の営みであると思うのですよ』

そうやって、豊満な胸を抱えて妖艶に笑うメイドは、まさしく百戦錬磨という雰囲気
を漂わせている。

『実際の行為を行った経験はないのですが……むしろ、必要ないとも言えるでしょう。

私はこんなにもご主人さまを愛せるのだから』

実際はそんなことはないのだが。

『ですから——ご主人さま。どうか私に、最高の奉仕をさせてくださいませ？ 貴方を
愛して愛して愛して愛して、壊して壊して壊して壊して、最高の死をもたらすお手伝い
を、私にさせてくださいませ』

ゆつくりと、彼女は俺に近づいてくる。

死を覚悟して、絶望すらも通り越し、恐怖なんてかなぐり捨てていたその時の俺は、強
くメイドを睨んだはずだ。そして彼女に対して吐き捨てるように言い放った。

——それは、絶対に愛などではない。

そんな愛、俺は絶対に認めない——と。その言葉に嗜虐心をそそられたのか、一層笑
みを深めるメイドが、やがてハンマーを振り上げて——

——そして、現在。メイドは俺の目の前で凄まじくきれいな土下座を披露していた。

「(ご)ご、ご主人さまあ、申し訳ありませんんん！ メメメメ、メイドはまたも不貞に働いてしまいましたああああ!!」

というのも、メイドは快樂殺人者だ。一瞬にして対象を拷問し、殺害し、〃至福の笑みを浮かべた〃状態で殺す拷問殺人のスペシャリスト。

それこそがメイド・メイドインアリスのブリ・テクだ。

彼女は対象を殺害することを〃不貞〃と呼ぶ。彼女にとって殺害とは愛の営み。俺はそれを否定したが、未だに彼女にとって殺しが最高の快樂であることに変わりはない。

俺以外を拷問すること、殺害することは浮気と変わらないと彼女は考えているのだ。実際、彼女が人を殺すとき、殺される相手は至上の快樂とともに殺される。身体的に絶頂を覚えるわけではないが、多幸感に包まれながら死亡する様は、見ていて明らかにヤバイものを服用しているようにしか視えない。

以前その後リスボンした者が中毒症状を発症し、メイドに襲いかかってきたことがある。流石にこのときは彼女の健康のためにも記憶洗浄を行わざるをえず、少しだけ俺

も申し訳ないと思わざるを得なかったが。

ともかく、そんな理由もあってか、正気に返った後のメイドは非常に卑屈だ。

わかっているにしてもスイッチが入ってしまったら、一度誰かを殺すまでその興奮を鎮めることができない。他の方法で代用することもできないものだから、彼女はそうなったらサイバー空間にログインして気が済むまでゲームで人を殺しまくっている。

まあ、

「メイドはご主人さまのものなのに！　ご主人さまだけに愛を向けなくては行けないのに！　またしてもそれが叶いませんでした！　メイドは！　メイドはダメな侍従なのですう!!」

——その場合でも、俺を殺せなかったことで不貞だなんだと自己嫌悪するのだから、もう少し欲求に正直に生きてもいいと思うんだけど。

とはいえ、そこがメイドのアイデンティティでもあるから、俺が否定できることはない。でもない。

「ありがとうメイド。俺はメイドが助けに来てくれて嬉しいよ。メイドは俺のメイドなんだ、そこは自信を持ってくれていい」

「ご主人さまあああああー！」

メイドが勢いよく抱きついてくる。となりでヒメミヤがなにやら騒いでいるが、こう

いうときは少しくらい堪能しても許されるよな？

あと配信のコメント欄もひどいことに成っている。基本的にいじられキャラのヒメミヤ以外が俺と絡むと、コメント欄が燃える。当たり前といえど当たり前だが、たまに本気でキレてる人がいるのはご愛嬌。俺のアンチスレは今日も勢いよく伸びるだろう。

まあ、ガチでキレてるタイプの人は、大抵ヒメミヤがそいつの犯罪歴をぶち抜いて逮捕されるんだが、まあそれはそれ。ネット上での罵詈雑言は犯罪だから気をつけよう。

「んで、ここはこういう場所なんだ？」

『もちろん、アンチツツナマヨネーズのアジトさ！ ここにたどり着くように先回りして準備してきたんだから、褒めてほしいな！』

「いや助かるけどさ……おもつくそ警報がなりまくってるんだけど、メイドが来なかったらどうするつもりだったんだ？」

——と、俺が言う通り、現在あちこちで警報が鳴り響いてとてもやかましい。分かりきっていることではあるのだが、確認したのは配信のためだ。

その後の確認は、まあしておかないと命に関わるからな。

『その時は……ははははは！』

「おこいぶつ」

——ちなみにヒメミヤも戦えなくはないが、基本パンカーはチーム行動が基本。一人

のパンカーでアジトを攻略することは難しい。ましてやヒメミヤはサポート要員なのであるからして。

俺を守って行動する——無茶もいいところだ。

『いや、ちゃんとたどり着けるようにはしてたんだって……』

「……あのねヒメミヤちゃん」

と、そこでメイドが恐る恐る手を挙げる。とても申し訳無さそうに、胸だけは揺らしながら。ヒメミヤの目がすごいことになっている。

「その……ですね？　急に呼び出されちゃって、えつと……その」

『……うん』

「…………端末の充電ができてなくなつて」

そうやって、メイドはおずおずと動かなくなつた端末——腕輪型だ。ここからホログラムが投影されてその画面を見ることができ——を取り出すと、ヒメミヤに見せた。

『o.h...』

「o.h...」

よくたどり着けたなあ、と思いながら、おれは冷たい目でヒメミヤを見るのだった。

まあ、合流してしまえばこっちのものだ。メイドはうちのチームでも単独戦闘力ではツートップの片割れ。一般の黒服に負けることはない。

大変なのはスイツチを入れないことだ。一度でもスイツチを入れてしまうと、メイドの殺戮は気が済むまで終わらない。止めようと思えば止めれなくもないが、明らかに労力が見合わないので、そのまま好きにさせるかそもそもスイツチを入れないようにしたほうが良い。

相手はガチのテロリストだ。慈悲はないが、かといって虐殺は彼らの量刑を逸脱している。簡単に言うとは過剰に罪の精算をすることになってしまい、下手をするとリスポーンしてしまう。生きた状態で捕まえて、檻に打ち込まないとテロリストは無限に湧いてくるのだ。

その上でメイドは――

「――あうっ」

びたーん。

「だ、誰だ!!」

――とてもドジである。なにもないところで転んで、その衝撃で周囲に気づかれた。周囲にはクマの被り物をした黒服が十名、絶体絶命である。

当然彼らは俺達が侵入者で分かるやん。発砲してくる。まずい、と思ったときにはもう遅い。

——直後、メイドが無傷で彼らを制圧していた。

一瞬の出来事だ。メイドは発砲された黒服の弾丸を、俺達に届くものは弾き、残りは回避して接近。手刀で彼らを気絶させた。ちなみに弾いたのも手刀である。

「ふう……あ、だ、大丈夫ですかご主人さま！ 申し訳ありません！」

「いや、ありがとう……そっちもスイッチ入ってないな？ ならよかった」

——まずい、と思ったときには、すでにメイドは敵を制圧している。

ブリ・テクを持たない敵に対して、メイドの力は圧倒的だ。一般人では見ることも敵わないそれを、配信では超スロー再生で見直すことができるので、なんとか視認できているという状態。

俺達は完全に知覚できなかったね。

つまるところ何がまずいかと言うと、何かの拍子に敵が死んでしまつて、メイドのスイッチを入れてしまうことだ。メイドのスイッチが入る条件は二つ。敵を殺したとき、もしくは俺が死にそうになったときだ。前者でも後者でも構わず興奮して発情してし

まうところに彼女の業の深さがある。

『ふむ、思ったより大したこと無いな。これならメイドくん一人で制圧できるんじゃないか?』

「またそうやってフラグを立てる……」

「そ、そうですよ。それにさつきだつて私のミスのせいで……人が死なないなら、それに越したことはないです」

えへへ、と頬を掻く彼女は、殺戮者となつているメイドとは別人のようだ。

実際そのようなもののだが——とまれ、この場合気にするべきは、ヒメミヤの不用意な発言だ。彼女はフラグを立てると、だいたい十秒以内に回収する。

本人が気付くのだ。

『つておい、ちよつとまで——?』

何やら、不穏なものを探知したらしいヒメミヤが、怪訝な声を上げる。

——まあ、何が来るかはおおよそ想像がつく。メイドはブリ・テクの持ち主、ブリ・テクにはブリ・テクでなければ対抗できない。もしこのアジトにブリ・テクの持ち主がいるのなら、最初からそれを投入しているはずだ。他の抵抗は無意味なのだから。

そうしていない、かつ敵が焦っている様子が見られない。ならばブリ・テク以外の対抗手段を彼らが有しているということだ。

——そして、この世界にそれに該当する存在が一ついた。
それは、

『——宇宙生物が接近してる！　くそ、アイツラなんてもの投入してるんだよ！』

宇宙生物。

——この世界を、この星を「滅ぼした」存在。ダイヤモンドブリがなければ、人類を
星ごと地上から消し去っていたであろう怪物。

それが、今回の俺達の敵、というわけだった。

OP V

——俺とメイドの関係は、当初敵同士だった。といつても、当時の俺に仲間なんてヒメミヤしかいなかったし、メイドは俺の二人目の仲間だ。

ヒメミヤがとんでもない爆弾だったために、早急に仲間を必要とした俺が、次の訳あり美少女を求めてメイドのいる地域にやってきたのがこの始まり。

次なる訳ありに、俺は心当たりがあったのだ。

メイドは「モジャコ」である。

何を言っているかわからないと思うので、超未来都市サイバータウンにおける「市民階級」について知ってもらわないと行けないだろう。

超未来都市サイバータウンは格差社会だ。市民階級の名の通り、市民にはそれぞれ階級が存在し、市民はその階級で許された生活しか送ることができない。

上流階級の人間は上流階級の生活しか許されていないし、下層の人間は上流階級の人間が暮らす地域に侵入することは許されない。

そんな市民階級の呼び名が、出世魚であるブリから取られているのが、この超未来都市サイバータウンの特徴だ。理由はダイヤモンドブリの存在。実はあのダイヤモンド

ブリ、一つで超未来都市サイバータウンすべての電力を十年まかなえる凄まじいエネルギーソースなのである。

ブリにそれほどの力があるわけだから、自然とコンピューターAGI様はブリを元に階級の仕組みを作った。

その中で、最上級の階級はブリ、そこから順にハマチ、イナダ、ワカシ、モジャコの順で下っていく。最下層がモジャコ——メイドはその出身だ。

ここでのポイントは、ブリは出世魚なので、超未来都市サイバータウンの市民も階級を「出世」させることができる。モジャコを除いては。

他にもブリ階級は長年のブリ市民の腐った努力のかいあって、よほどの理由がなければ出世できないくらいに凝り固まっているが、制度上出世は可能だ。しかし、モジャコ階級はワカシ階級への出世は制度上不可能であり、モジャコ階級は言ってしまうえば奴隷階級。モジャコは他の市民にたいして絶対服従、もし道端で声をかけられたら、あらゆる命令——性交渉だろうが、自死の命令だろうが——受け入れなくてはならない。そもそもモジャコが自身の生活可能区域の外に出る権限は基本ないのだが。

なぜそんなことに成ったかと言えば、もともとモジャコは超未来都市サイバータウンと敵対していた者たちが降伏した際にあてがうための階級だったからだ。その後、その階級が子孫に受け継がれ、今の奴隷階級としての立場が出来上がった。

結果、俺はそこに目をつけて、次の訳あり美少女を探そうと考えた。現代の倫理観で言えばできるだけやりたくはなかったのだけど、ヒメミヤのことで追い詰められていて、他に方法もなかったんだ。

なのでメイドの「訳あり」はすなわち『奴隷』。俺はそれを現代の感覚で甘やかすことで懐かせようと考えた。

——結果俺の元へやってきた「奉仕者」は、「死を奉仕」する狂人だったわけだが。話を戻そう。

いや、これも大事な前フリではあるのだけど、そもそも俺が今気にするべきは、目の前の敵のことだ。

そう、敵。わざわざなんで遠回りしてメイドの話をしたかといえ、ここにつなげるため。かつてモジヤコは敵勢力の捕虜を表す言葉だった。

超未来都市サイバータウンは発展の最中に多くの国や都市と対立し、勝利してきた。これは敵が多かったというのもあるが何よりも——勝利しなければ、生き残れなかったからだ。

当時、世界は滅亡の瀬戸際にあった。人類はそこで結束することも叶わず、個別に撃破されていき——「ダイヤモンドブリ」を取り入れた技術を有するコミユニティだけが生き残った。

その最大勢力が超未来都市サイバータウンなわけだけど、そもそもどうしてこの世界は滅亡の瀬戸際にあっただか。

理由は単純、ダイヤモンドブリがこの世界に出現するのを時同じくして、
“が宇宙からやってきたからだ。”

宇宙生物。

エイリアンだとか、プレなんかだとか、ベーなんかだとか、そういった名前がつけられるような人類を襲う怪物。

それらはまたたく間に人類を追い詰め、しかし既のところではダイヤモンドブリによって制圧された。

今、俺達の目の前にいる存在は——その生き残り。かつて人類を滅ぼしかけた怪物を、今度は人類が使役して、人類に対してけしかけようとしている、その現場だった。

「ご主人さまあ！ どぞどぞ、どうしましょう！ メイド、対宇宙生物装備は持ち合わせて

いませんー!」

「流石にこんなの読めねえよな! しょうがねえよ!」

『ハツハツハー、ごめん!』

宇宙生物というのは非常に厄介で、専用装備を使わないと如何にメイドでも安全に戦うことは叶わなくなる。理由は色々あるのだが、問題は装備を用意できなかったことだ。

ヒメミヤなら、宇宙生物の存在は事前に察知できたはずだ。実際、ヒメミヤが俺達に宇宙生物の存在を伝えた時、彼女は「なんてものを投入するのか」と叫んだ。知っていたのだ、当然である。

しかし、投入するとは考えていなかったのだろう。

当たり前だ、宇宙生物とは万が一解き放つてしまえば、最悪そこから世界が滅亡する可能性すらある存在だ。ダイヤモンドブリ由来の技術を使った装備がなければ傷つけることは不可能に近く、現在メイドは見ての通り素手である。

常識的に考えて投入するはずがないのだ、そんな劇物を。

ヒメミヤは優秀なハッカーではあるが、弱点もある。最終的に彼女は自分が得た情報を自分の考えで俺に伝えなくては行けないという点だ。

今回、そこを突かれて向こうの行動を読めなかった。流石にそれを責めるのは酷とい

うもので、俺達はすぐに対処へ動かなくてはならない。

『まずはこの放送を見ている視聴者諸君、中でもこのエリアに隣接する区域にいる市民は即座に逃げたまえ！ これは警告ではない、命令だ！ この命令に反した者は階級剥奪の処分がくだされることを忘れないように！』

「メイド、最悪宇宙生物がメイドでも対処できるかもしれない可能性はある。すぐに確認するぞ。ただドジるとマジで死にかねないから、調査は俺がするからな？」

「ご、ごめんなさいご主人さまあ、メイド、メイドこういうときにヤクタタズでえ」
「普段十倍助かってるからいいんだよ」

——俺達の行動は迅速だ。

過去に何度か宇宙生物とやりあった経験があるために。ただ残念ながら宇宙生物という単語事態が歴史の教科書くらいにしかなかった市民たちにはピンと来ていないように、『必死過ぎて草』というコメントがあちこちで見受けられる。

流石に階級剥奪——つまり一個下の階級に落とされることになる市民たちは文句を言いながらも従っているが。

それでも、温度差はあった。

俺とメイドが恐る恐る、反応のあった方向へ進み、様子を伺う様を視聴者たちは楽しみに眺めている。そんな、チグハグな状況で——

「……グララじゃねえか」

——一瞬にしてそのコメントが停止した。

同時接続人数、0人。

俺の発言と同時に、視聴を打ち切って市民たちが避難を開始したのである。今ここに、俺達の配信を見ている人間は——否、日常生活を行っている市民は途絶した。

市民たちは即座に逃げ出して、俺達は目の前に立ちほだかる最悪へ、唾を飲みながら視線を向けていた。

グララ。

そもそも宇宙からやってきた生物は一つではない。一斉に——数百という種類の宇宙生物がこの星へと突如やってきたのだ。原因はダイヤモンドブリという凄まじいエネルギーリソースであると推定されているが、根本的な結論ははまだ出ていない。

その中で、“最悪”と言われる種族が存在していた。

それがグララだ。

その姿かたちは、無骨な狼のような姿をしている。白銀の、美しい毛並みをした狼だ。しかし、口には異形とも言える牙を有し、その目は四つ、左右に二つずつ存在している。

宇宙生物の中では、比較的地球に存在する生物に近い姿をしており、当初グララは数多の宇宙生物の中ではそこまで危険度は高くないとされてきていた。

数が少なかったからである。見かける機会がなかったのだ。

「数は……一体か、幸いってわけじゃないが、まあ異常個体じゃないだけマシ、か」
「で、でもご主人さま……成体ですよ……あの子」

「メイドにもそう見えるか？ 俺もなんだよ……目が壊れてんのかな」

そして同時に、この世界にやってきた当初、成体のグララは存在しなかったから。グララの特性は成体になってから発揮される。故に人々が認識した頃には、成体のグララは世界各地に存在してしまっていた。

結果、世界の半分がグララによって“食い殺された”。

もともと、この世界は宇宙生物によって滅ぼされ、人類同士の内輪もめで終焉へと一気に向かっていたのだが、ある時とある科学者が気付いた。

人知れず滅んだとある国家。これはグララとは別の宇宙生物による仕業だと考えていたが、実際にはグララであった——と。

「それにしてもお……相変わらずすっごく綺麗です……」

「おいまで、グララでスイッチを入れるな、最悪死ぬぞ!」

ガクガクと、メイドが揺れていた。自身の中で殺人衝動がふつつと湧き上がっているのだろう。先程まで殺さずに制圧してきた反動もあつてか、メイドは限界を迎えつつあつた。

しかしだとしても、装備のないメイドにグララは倒せない。無謀極まりないので止めるしかない。なんてことだ、止めようとする最悪俺に矛先が向くぞ。メイド本人にも制御はできないんだからな。

「だつてだつて! グララ様といえば、生命の絶対殺害権と情報過食! 奪つて奪つて奪い尽くす、メイドの憧れなのでございますよお!!」

「落ち着けー!!」

いよいよもつて耐えきれなく成つたメイド。痙攣は更に激しくなり、いよいよ限界だ。

んで、そんなメイドの発言の通り、グララには二つの特性がある。どちらも成体にならないと発揮されない特性で、それぞれ名前通りの非常に物騒な代物である。

生命の絶対殺害権。

これはグララにふれることで発揮される。グララは触れた相手を殺害することができる。殺害の方法は任意。病気を植え付けることも、最初からいなかつたことにするこ

とも、普通に噛み殺すことも可能。

恐ろしいことに、ヒメミヤはSDヒメミヤロボを操っているわけだが、このロボにふれることで操縦者であるヒメミヤを殺すことが可能だ。

情報過食。

グララが対象を噛み砕いた場合、その対象はこの世界からいなくなることになる。グララはデータを食べているのだ。その最大が、この過食。人をいなくなつたことにする食事。

厄介なのは、グララが別の方法で対象を殺害した後に、それを飲み込んでも効果は発揮される。噛み砕く必要はあるが、噛み殺す必要はないのだ。

『いやしかし、こちらにはすでに気付いているだろう。対処はしなくてはいけないぞ』

「けどなあ、いくらメイドだからって、グララの相手は無理だ」

「あうう……ぐ、グララ様……い、いえダメです。メイドは楚々なメイドに生まれ変わると決めたのです。心は清純であらねばならないのです……!」

いや、メイドの場合肉体は清純でも心が腐つてるじゃないか、と思つたものの、努力を否定することはできないので黙っておいた。

『……手は打つてある。まもなく対抗手段がそちらに到着する』

「え? ガルルちゃんが来てくれるんですか!」

ヒメミヤの言葉に反応したのはメイドだ。そりやそうだ、ヒメミヤの言葉からできる推測と、今日非番である人間の逆算から、俺達が取れる手はそもそも一つしか存在していない。

ガルル・グラララ。

俺達のチームに所属するパンカーの一人で、グララに対して、
 “常に有利を取れる”
 唯一の存在。それを知ったメイドが、ぱあつと顔を輝かせる。

『ただし、三分だ。三分、グララを抑えてガルルくんにつけないと行けないぞ』

「……じゃ、じゃあ」

触れただけで対象を殺害できる存在相手に、素手で三分。いくらメイドがブリ・テクを有する殺人者だとしても、メイドは殺人者であり、殺害の概念ではないのだ。

無茶もいいところ。

——いや、

「や、やっていいんですかあ!? グララ様とそ、その……致しても!」

『清楚はどこ言ったんだ!』

……メイドはスイッチをすでに入れていた。

つまり発情していた。体を何度も震わせながら、一步前が出る。グララは——動かなかった。油断していないからだろう。相手がブリ・テクであることを、あいつは理解し

ている。

言語を発さないだけで、その知能は人間以上であると言われるグララなのだから、当然のことだ。

「——メイド」

「ぴゃあああああああああ!!!」

俺は、完全にあつちにイっちゃっているメイドに声をかける。

——結果、正気に戻った様子で、目をぐるぐるさせながら、顔を真赤にしてこつちを見た。彼女いわく、また不貞を働いてしまったということだろう。

が、しかし。

「俺は、お前の殺人癖や殺人嗜好は正直どうかと思う。可能なかぎり殺すときに拷問しようとするのも頭おかしいんじゃないかと思うし、殺されたときに至福の快樂を得るとか漫画の読みすぎじゃないかと思う」

「ぐさっ！　ぐさぐさっ！　ぐさきーっ！　ぐさきーっ！」

——しまった前置きで本音を口に出しすぎてメイドに刺さりまくった。ほら、そこでへたり込むとやばいだろ！　グララくんちよつと困ってるじゃないか。

……じゃない、刺したのは俺だ。

「——でも、お前の腕は疑ってない」

正直、殺人嗜好にはついていけないし、それを他人に向けることを不貞と言われても、俺としては困惑するしかないのだが、それはそれとして。

メイドは俺の仲間だ。俺を殺したい、殺すことで快樂を得たい。そう常々口にしていようと、

「お前は俺の『メイド』だ。俺はその言葉を、曲げるつもりは絶対にない、だから。——
行つて来い、俺はお前を信じてる」

「——あ」

かつて、口にした約束があるから。

「——はい！ 行つてきます！」

メイドは俺のメイドで、俺はメイドの（ご）主人さまだ。

「……でも、別に私が倒しちゃってもいいんですよね？」

—— いや、それは死亡フラグだからやめような？

——メイドにはご主人さまがいます。
ヒューゴ・ハジメマシテ様。

かつて私はご主人さまの敵でした。いえ、正確には違います。私は最初、ご主人さまとお互いの立場を知らずに知り合ったのです。ヒメミヤちゃんの件でモジャコエリアに逃げてきたご主人さま、モジャコの一市民だった私。お互いに偶然から知り合って、そしていくつつかの交流を行いました。

ご主人さまも私も当時は幼く——私はドジでダメなメイドでしたから、ご主人さまには色々と迷惑をかけてしまったと思います。

そんな中で、私はご主人さまがハマチ市民であることを知ってしまったのです。色々あって、モジャコに逃げてきたのだと聞きました。

——信じられませんでした。曲がりなりにも超未来都市サイバータウンのハマチ市民が、モジャコエリアにやってきて、それを隠せるはずがないのです。モジャコ市民に、嫌悪感を隠さず話せるわけがないのです。

それでも、ご主人さまは言いました。

『それで死んだら元も子もないからな』

なんてことのないように。

——今にして思えば、ご主人さまの人間性を考えれば、本当にそう考えていたので

しようが、当時の私にしてみればそれは青天の霹靂でした。

死にたくないから、という理由だけでモジャコに対する偏見は無視できるものではないのです。子供の頃から、そう認識するよう教育されるのですから。

ですから私には、そんなご主人さまの言葉が、他とは違う隔絶した意志の強さに思えたのです。

ああ、だから――

その時、私は一度ご主人さまに惚れてしまったのでしよう。

そして、こう考えたのです。

――そう考える素敵なご主人さまを、私は殺してしまいたい、と。

当然の考えだったと思います。

それこそが私の美学、芸術観だったのですから。

それが、今。

ご主人さまを背にして、私は私が殺されるかも知れない相手と相對しています。

かつての私に、殺せない相手はいなかった。――いることを知らなかった。ご主人さま

まは殺したい相手で、今は守りたい相手。

何もかもが違います。私は私であるがまま、ご主人さまへの思いは、当時とは何もかも。

でも、ご主人さまは何も変わっていない、変わってないんです。

あの頃から、その意志を変えず、今も生きるために必死に頑張っている。そんなご主人さまを好きになれて、私は嬉しい。

こんな淫らでふしだらな女ですが、私はご主人さまが世界で一番大好きです。

——貴方と、貴方の大切なすべての仲間たちを、私は守りたいと思うのです。

だから見ていてくださいご主人さま。

メイドは、今から——眼の前の強大な敵を、貴方のために殺して見せます。

——と、そう考えた時。

突如として天井が崩落、とつても大きいご飯茶碗が落ちてきて、グララ様を閉じ込めてしまいました。

あ、これ、私が木彫りのクマ（鯉節）を朝食にする際に使ったお茶碗ですね。

なんて思っていると、

更に続けて降ってきた“なにか”によってお茶碗は粉微塵となり、

中に収まっていたグララ様は、死亡が確認されるのでした——